

No.40

# セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

発行 2004.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 古場勝憲

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1

TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

<http://www.pref.saga.jp/kyouiku/kyuto/>

E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp

印刷所 山口印刷株式会社・伊万里市



## いろえこまいぬ 色絵狛犬

館蔵資料

有田 1680~1700年代

最大幅 阿形40.4cm／吽形37.6cm

高さ 阿形48.2cm／吽形46.5cm

底径 阿形21.0cm／吽形21.0cm

狛犬の起源は、エジプト、ペルシャ、インドの神殿前を守るライオン像です。中国に伝わると唐風の獅子になり、犬の一種と考えた日本では、「高麗(こま)犬」となりました。神社や神殿の前に、口を開いた阿形と口を結んだ吽形一対が向かい合う狛犬は平安時代からあり、中世になると玉を持った玉取獅子の形も加わります。

やきものの狛犬は、瀬戸で13世紀後半頃から作られます。磁器の狛犬は肥前で初めて焼かれました。神社に奉納する銘文から、元禄年間(1688~1704)に集中して作られたようです。現存するこの頃の狛犬は6件、うち佐賀市伊勢神社伝来の本例だけが一対で残っています。

特別企画展のお知らせ

# 「初期伊万里展 - 染付と色絵の誕生 -」

○趣 旨

江戸時代初期の1610年代に朝鮮国(現在の韓国)の技術により、わが国で初めて磁器の焼成に成功した有田窯では中国景德鎮の染付磁器を目指しながらも、力強くおおらかな表現に独自性の感じられる磁器を生み出しました。また、1640年代には新たに中国の技術を導入して色絵の製作も始まりました。

本展は、今日でも陶磁器愛好家に高い評価を受けている、これら肥前磁器の草創期から初期における染付と色絵を紹介し、初期伊万里の魅力に迫ります。さらに、近年の調査で初めて明らかになつた伝世品や出土資料も展示する新しい視点からの展覧会です。

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館

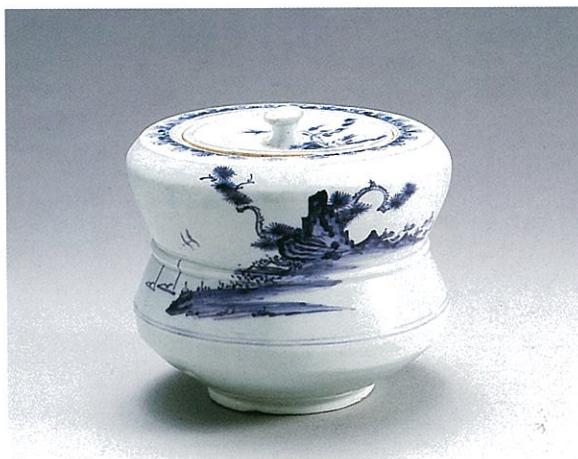
○会 期 平成16年9月11日(土)～10月24日(日)  
44日間(会期中無休)

○観 覧 料 大人620円(510円)  
大学生300円(200円)  
高校生以下及び障害者の方は無料  
※( )内は、20名以上の団体

○出品点数 288件 287点

○展示内容 江戸時代初期の染付磁器、色絵磁器の名品を一堂に展示します。

○図 錄 展示品を掲載した図録を刊行します。



染付山水文胴締水指  
有田 1610～30年代 栗林コレクション



染付花実文皿  
有田 1640年代 大阪市立東洋陶磁美術館蔵



色絵幾何学文壺  
有田 1640年代 個人蔵



色絵双蝶文大皿  
有田 1650～60年代 個人蔵

## 「新収蔵品展」のお知らせ

- 会期 平成16年6月1日(火)～6月24日(日)
- 内容 平成15年度に購入・寄贈により新たに収蔵した資料を紹介します。今回は、見込みの菊花の陽刻や三足の透かし文様が美しい青磁菊花形三足付皿の他、薩摩焼の象嵌耳付瓶なども展示します。
- 展示数 約40点(予定)
- 会場 第1展示室



青磁菊花形三足付皿  
有田 1660～70年代

## テーマ展 「寄贈品による名品選」展の お知らせ

- 会期 平成16年11月9日(火)～12月12日(日)
- 内容 開館以来、当館に寄贈された資料の中から厳選した肥前や九州の陶磁器の名品を展示します。
- 展示数 約80点(予定)
- 会場 第1展示室



鉄絵草文片口鉢  
肥前 1590～1610年代

## テーマ展(新春展) 「干支 酉の文様」展のお知らせ

- 会期 平成16年12月15日(火)  
～平成17年1月16日(日)
- 内容 今年の「とり年」にちなみ、鳥形や鳥を描いた陶磁器を展示します。鶴の形をした皿もあります。
- 展示数 約80点(予定)
- 会場 第1展示室



染付蒔絵鳥籠装飾付広口大瓶  
有田 1690～1730年代

## テーマ展(やきものの見方シリーズ1) 「やきものの種類」展のお知らせ

- 会期 平成17年2月9日(水)～2月20日(日)
- 内容 磁器と陶器の違いや、白磁、青磁、染付、色絵、など、やきものの種類を分類して体系的にわかりやすく紹介します。
- 展示数 約100点(予定)
- 会場 第1展示室



色絵双鳥松竹梅文輪花皿  
有田 1670～90年代

## イタリアの有田磁器を訪ねて

1990年7月6日から11月4日、ロンドンのThe Oriental Ceramic Society主催による‘Porcelain for Palaces-The Fashion for Japan in Europe 1650-1750’が大英博物館に新しく完成した日本ギャラリーで開かれ、英國を中心にヨーロッパの公私のコレクションからの東洋陶磁と関連の西欧磁器が計365件、展示された。筆者はこの30年、英國のカントリー・ハウス(countryside house 英国貴族が自分の領地に建てた邸宅)に伝世する東洋陶磁を調査しているが、この展覧会で示す有田磁器輸出最盛期はカントリー・ハウス建造の最盛期と重なり、貴族達はいわゆるグランド・ツア(Grand Tour)と称されるヨーロッパ文化吸収の旅に出てイタリアまで行き、買い込んで来た絵画、彫刻、家具調度で自分の邸を飾り、中国陶磁に統いて東洋からもたらされた有田磁器を、その家具の上、絵画の間の壁に装飾として置いたが、その装飾のお手本としたイタリアから上述の展覧会になにも出品されておらず、日頃もイタリアの所蔵品の報告を眼にすることがないので、イタリアにはもう、なにも残っていないのかどうか調べてみようと思い立ち、イタリアへと向った。

まずファエンツァ(Faenza)のMuseo Internazionale delle CeramicheのBojani館長を訪ね、翌日、訪ねるべき美術館のリストの手書きしたものをいただき、まず一気にナボリまで南下、ソレント、ローマ、アレッツォ、フィレンツエ、ミラノと北上し、翌夏、再びイタリアを訪れ、フィレンツエで1週間を東洋陶磁の調査に充てた。その翌年にはヴェニスの東洋美術館を訪れる機会を得た。調査からすでに10年以上が過ぎたが、イタリアに残る有田磁器に関する報告がないまだにあまりない様子なので管見を記す。なお地名、固有名詞はイタリア語綴りである。

NAPOLE

Palazzo e Galleria Nazionale di Capodimonte

(火曜～土曜10:00～19:00、日曜9:00～14:00、月曜・祝祭日休館)

1738年から1838年にかけてナポリ北部の丘陵に建造された王宮の2階に旧王室居住区があり、恐らくFarnese, Bourbon両家によって集められた大量のイタリア、トルコ、中国の陶磁器が3室に収蔵されている。胴に透かし彫りのある有田の沈香壺(類品はカッセルの展覧会図録のNo.266)が多数の中国の沈香壺に混じって近くのケースの中にあるのが見えたが、他にどのような有田磁器があるかは不明である。同じ階に、壁が中国風に装飾され小さな陶磁器をその上に飾ったと思われる台が



---

Palazzo e Galleria Nazionale di Capodimonte, Napoli

たなかしげこ  
田中恵子

- 日本アジア協会理事
- 東洋陶磁学会(日本)会員
- The Oriental Ceramic Society(ロンドン)会員

壁に取り付けられた小部屋がある。中国の壁紙、中国風の装飾を壁に施した小部屋を設けることは一時期ヨーロッパ中の宮殿や貴族の館に流行したようで、北は英國のエдинバラ郊外の18世紀建造の貴族屋敷にまで同様の小部屋が二つあり、その一室には同時期の中国、日本の陶磁器がそのまま残っている。

Museo Nazionale di Ceramica Duca de Martina

(9:00~14:00 月曜・祝祭日休館)

Martina公爵Placide de Sangroが1866~69年にパリで集めナポリに持ち帰り、その後もパリで買い続けた陶磁器のコレクションで、1891年に彼の死後同じ名前の孫が相続し、ナポリで更に買い続け、1911年に彼が死去すると翌1912年に未亡人がナポリ市に寄付し、市がその邸宅を美術館として発展させてきたもので、三分の一が東洋陶磁である。瓢箪を背負い太鼓の上に座る色絵童子置物2、色絵甕割人物文八角皿2、色絵梅竹鳥文十角皿1を含む約20点の有田の色絵がある。そのほか色絵岩鳥牡丹文瓢形瓶、色絵壺持婦人立像などこの館の所蔵品4点が当時アレツォで開かれていた江戸時代の装飾文様展に出品されていた。このナポリから電車で約1時間のソレントのMuseo Correale di Terranovaには有田の径27cmの色絵皿が1枚ある。

ROMA

Museo di Palazzo Venezia (9:00~14:00 月曜休館)

15世紀の初期ルネサンス建築の建物の2階に中世の美術が中心の美術館があり、その階上の非公開の小さな一室に17世紀末から幕末明治までの多数の色絵の沈香壺と筒型広口瓶が、有田の染付の沈香壺1、色絵の大皿1、一对の鶴、中国の色絵の沈香壺などと一緒にいくつものガラスケースの中に収められている。

FIRENZE

Museo degli Argenti, Palazzo Pitti

(8:30~13:50 第1・3・5月曜、第2・4日曜休館)



Museo degli Argenti, Palazzo Pitti, Firenze

15世紀にPitti家のために建てられ後にMedici家が両側棟を建て増して1560年に宮廷を移した堅固な建物の向かって左の棟の2階の2室に202件の主に清朝の色絵と白磁、有田のものは15枚の大皿を含む56件の17世紀末からの色絵が展示されている。大皿の2枚は柴田コレクション総目録のNo.2786とほぼ同じである。有田の色絵は1731年までFarnese家、その後Bourbon家が支配し、フランスの影響が強かったパルマで1861年に

作られた収蔵目録に載っているものが多く、その年にSavoy家がイタリアを統一してトリノを首都にし、1866年に首都を一時、フィレンツェに移したので、それに伴うコレクションの移動かと思える。もともとフィレンツェを支配していたMedici家はフランスの王侯貴族との婚姻関係が強く、18世紀に入るとその大公位はフランスのLorraine家に、その後1814年までNapoleon Bonaparte、ふたたび1859年までLorraine家と移動し、その間、Medici家のコレクションから東洋陶磁が売られ、他からの収蔵品が混じり、現在残る収蔵品には数種の収蔵番号が書かれているものが多い。収蔵庫には青磁の衣をつけた17世紀後半といわれる羅漢座像があり、その類品は前述の1990年のPorcelain for Palaces展に出品された英國の貴族屋敷Erddig所蔵の2体(展覧会図録No.157)、ロンドンのV&A Museum所蔵の1体、ミュンヘンのResidenzmuseum所蔵の2体がある。そのほか、大量のChinese Imariの皿が積み重ねられているそばに、柿右衛門様式の小皿も数枚あった。階上の屋根裏部屋には蓋のない高さ54cmの有田の沈香壺があった。

#### Apartamenti Reali, Palazzo Pitti

(5~10月 8:30~21:00 〈日・祭日 20:00〉 月曜休館)

本館の2階にある旧王室居住区。筆者の訪ねた当時は非公開で、ここに所蔵されている沈香壺などは棚包されたままで見られなかつたが、表面のモザイクが東洋陶磁の一群を描いた装飾となっている18世紀製作といわれるテーブルと、その中心に描かれた有田の色絵の鉢の実物(径45、高25)が一对収蔵されている。1993年有田ボーセリンパークオープン記念「海を渡った古伊万里」展に展示されたドレスデンにある鉢(図録No.67)とほぼ同意匠であるが、少し口が開いている。室内の飾りケースにはMuseo Argentiの展示に出ているのと同じ、有田の色絵蓋付き持ち手なしカップと受け皿が入っていた。



Apartamenti Reali, Palazzo Pitti, Firenze



Museo degli Argenti,  
Palazzo Pitti, Firenze

#### MILANO

##### Museo dell' Arte Antica, Castello Sforzesco

公開展示は主にイタリアの陶磁器で、大量の東洋陶磁が倉庫に眠っている。17世紀末から幕末明治の沈香壺、広口瓶、Chinese Imariと混じて積み重ねられた有田の皿などの横に、色絵碁盤童子置物があった。型は九陶、大英博のと同じであるが、童子の着物の柄が九陶のは桜花散らし、大英博のは扇子と亀甲文であるのに対し、もみじ散らしである。碁盤は大英博のは中国の白磁の獅子の置物によく見られるように、碁盤の人形の右後ろに立ち上がった注口が付けられ、碁盤の裏底が閉じられているのに対し、九陶のミラノのは注口はなく、裏底が開いている。碁盤の側面の花唐草は九陶のと大英博のは五弁花様の簡単なものであるが、ミラノのは中心の牡丹の花びらが重なりあり、細かく描かれた葉は左右に広がり、碁盤の目も細かく描かれている。よく見ると陳列ケースの上に並べられた沈香壺のうちの3個と戸棚の中の筒形広口瓶2個とは同じ模様で、5個組が少なくとも1セットあることがわかる。



Museo dell' Arte Antica, Castello Sforzesco, Milano

#### GENOVA

Via Garibaldi沿いの16世紀の貴族屋敷の一つに、大英博物館に1対、英國の南西部プリマス近郊の貴族屋敷に3個ある有田色絵の沈香壺と同種のものが小部屋の3隅に置かれ、別の部屋の机上には同じ文様の筒形広口瓶が1対があるので、ここにも5個組が1セットあることになる。

以上のほかヴェニスのMuseo Orientaleは非公開であるが沈香壺3、有蓋大鉢1、角瓶4、瓢形瓶2、水注4を含む18世紀から明治までの約30件の色絵の有田磁器があり、平戸の台付花瓶1対、鍋島の皿3枚もある。ファエンツァのMuseo Internazionale delle Ceramicheには色絵の鉢、染付の大皿を含む18世紀から明治までの約60点の有田磁器が展示されている。



Genova

## 平成15年度寄贈記念展の報告 「白雨(はくう)コレクション展」

○会期 平成15年10月3日(金)～10月24日(金)  
(月・祝日)48日間(会期中無休)

白雨コレクションは、佐賀県出身の故蒲原信一郎氏(号「白雨」)が収集された陶磁器の一部(444件 925点)を、平成14年度に寄贈を受けたものです。

この寄贈記念展では、肥前の陶磁器を中心に、茶道具類を含む九州、日本、東洋の陶磁器も含むコレクションから、厳選した378件 844点を展示し、作品解説付きの図録「白雨コレクション100選」を作成し好評を博しました。

記念茶会(10月18日(土)13:30～15:30)、学芸員による展示解説(10月25日(土)14:00～15:00)、総数3,186票を集めた人気投票などの行事を行い、入館者(総数 11,051人)の方々に楽しんでいただきました。なお、常設特別展のため入館は無料でした。

また、県内外のやきもの愛好家にこの展覧会を紹介

するため、佐賀北郵便局(10月3日～11月21日)と佐賀県福岡情報センター(10月17日～26日)でコレクションの一部を展示しました。



白雨コレクション展開会式館長挨拶



青磁觚(こ)形瓶(鍋島藩窯 1700～70年代)他



色絵捻花文輪花鉢(肥前・有田窯 1770～90年代)他

## 平成15年度の展覧会から 第100回九州山口陶磁展

○会期 平成15年4月29日(火)～5月11日(日)  
13日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足以来、記念すべき第100回目を迎えました。九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、技術と品質の交流、デザインの改善を図り、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的とします。102点の入賞・入選作品と過去25年の第1位作品を展示しました。会期中9,271人の観覧者がありました。



展示状況

## 片岡渡陶書展

○会期 平成15年6月18日(水)～6月27日(金)  
9日間

有田町原宿で書道塾を開く片岡渡氏の80歳のお祝いである傘寿を記念して、弟子達が企画した展覧会。片岡渡氏と弟子の集まり「楽書会」の作品展。染付で文字を描いた30cm四方の陶板など、美濃紙を陶板にかえ、墨を呉須にかえて陶書として表現した作品約120点を展示しました。「紙ではあらわせない陶書ならではの味わいを楽しんでほしい」と片岡さん。

会期中1,290人の観覧者がありました。



## 岩永範彦遺作展

○会期 平成15年9月2日(火)～9月7日(日) 6日間

岩永範彦氏は、西有田生れの陶芸作家で、日展を舞台に活躍されていましたが、平成14年9月に43才の若さで他界されました。前田泰昭氏を会長に、早逝した逸材を惜しむ有志による実行委員会が組織され今回の遺作展が開催されました。

岩永氏はロクロ成形による大型の白磁製品を得意とし、作品のもつ重厚かつ柔らかなフォルムには氏の追究したシンプルな造形美が表れていました。展覧会は連日、御遺族や御友人をはじめ、多くの方が観覧され、会期中1,468人の観覧者がありました。



## テーマ展「宴の大皿」展

○会期 平成15年9月17日(水)～9月28日(日)  
12日間

磁器の大皿は江戸時代初期に有田で生産が開始され、染付・色絵・青磁などさまざまな種類のものが作られました。この大皿には肥前陶磁の伝統と技法が集約されており、描かれた文様や意匠には当時の世情や気風が強く反映されています。

今回の展覧会では、肥前陶磁史における「大皿」の変遷と各時期の特色を古唐津及び初期伊万里から幕末までの大皿により紹介しました。会期中2,489人の観覧者がありました。



## 一水会陶芸部第45回記念展

○会期 平成16年2月11日(水)～2月22日(日)  
11日間

一水会は当初、洋画の会で出発した団体ですが、昭和33年、洋画家の硝伊之助氏や木下義謙氏、13代酒井田柿右衛門氏、12代今泉今右衛門氏が発起人となり、陶芸の公募展として発会しました。佐賀県の有田、石川県の九谷が主体となり、四国の砥部、岡山の備前が加わり、今日の発展につながっています。

今回の記念展では、委員や会員の作品及び九州の一般出品作品の合計54点を展示しました。会期中2,276人の観覧者がありました。



## シリーズ

## やきものの技法 (35)

ふき  
吹すみ  
墨

染付の一つの技法で、呉須を霧吹き状に吹きかけることにより線書きや濃(だ)みではできない濃淡やグラデーションを表現することができます。呉須を含ませた筆を直接吹いて散布した細かい吹きつけ自体を文様としたものと、型紙の上から噴霧機のような道具で呉須を吹きつけ白く抜いて文様を表現したものがあります。

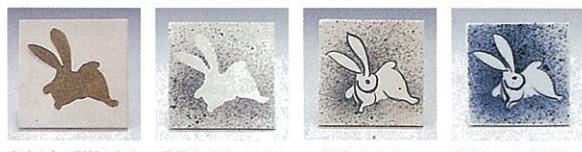
中国明時代の古染付がその起源とされ、有田では初期伊万里の時期(1610~40年代)から使用されています。初期伊万里の窯跡である山内町の百間窯や有田町の天神森窯などからは型紙を用いた吹墨の製品が出土しています。

型紙を用いる吹墨の製作工程は、まず、文様を入れる部分を型紙などで伏せておき、その上から呉須を噴霧して細かい点状の絵付けを行い、その後、文様の表現を仕上げます。

吹墨技法は、下の写真のような「月兎文」が典型で人気のある文様として多く用いられています。兎は古くから絵画や工芸品に好んで描かれた吉祥文で、桃山時代の唐津焼や織部焼の鉄絵にこの文様がみられます。月とともに描かれた「月兎文」は中国では不老不死・再生の象徴として古代から愛好されており、中国明末(17世紀前半)の古染付に同じ図柄の吹墨がみられます。初期伊万里の染付月兎文は中国の古染付の月兎文を手本として製作されたと考えられますが、兎の耳が長い点など細部に相違がみられます。兎を単に模倣するのではなく日本好みに変容させていった有田の陶工達の創意工夫が伺えます。

(森田孝志)

## 型紙を用いる吹墨の製作工程



素地の上に型紙をおく 呉須を吹きつける 線書きをする 茶葉をかけて焼成する

染付吹墨月兎文皿  
有田 1630~40年代

## シリーズ

## やきものにみる文様 (35)

おう  
桜  
か  
もん  
よう  
花  
文  
様

『日本国語大辞典』(小学館)によると、さくらは「バラ科サクラ属のうちの一群。おおむね落葉高木。北半球の温帯ないし暖帯に分布し、特に東アジアに多く、数十の野生種がある。花はふつう春に咲き、葉の展開に先立って開くことが多い。淡紅・白などの美しい五弁花で、八重咲きのものもある。古くから和歌や絵画に取り上げられ、現在は日本の国花とされる。」と記されています。

和歌に「世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからましく在原業平」(古今一春上・53)詠まれているように、桜花は私達の心を「のどかさの」反対の境地である「狂おしい」ものにさせる。短期間のうちにいっせいに花開き、そしていっせいに散ってしまう。なんともきせわしく、気がかりであります。

桜樹そして桜花の文様は肥前磁器にはよく見かけます。柿右衛門様式の作品、古伊万里金襤手様式の作品、そして鍋島藩窯の作品には丁寧にそれらを描いたものが多くあります。

この作品は鍋島藩窯で制作された色絵のついた「色鍋島」の七寸皿で、しっかりと根を張った桜樹を染付の輪郭線で描き、幹そして枝と丁寧に呉須で濃み塗りしています。桜花と葉はそれぞれ染付の線描きをして、その上に桜花は赤、葉は緑と黄の上絵具で彩っています。

画面に桜樹をめぐらすこの構図は、専門絵師によって描かれた鍋島の図案帳に同様のものがあります。(『鍋島藩窯の研究』鍋島藩窯調査委員会編・昭和29年発行・97頁)それによると、この図の側に記されている「享保三戌戌」の墨書によってこの図が享保三年(1718)頃に描かれたと考えられます。

(吉永陽三)

色絵桜樹文皿  
鍋島藩窯 1700~30年代